リアリストによる絵空事

上下 左右

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リアリストによる絵空事

【Ｎコード】
Ｎ８１６１Ｖ

【作者名】
上下　左右

【あらすじ】
童話を現実的にアレンジしています。
物語性重視コメディ、となる予定です。
シンデレラ・白雪姫・眠れる森の美女ｅｔｃ.

シンデレラ　ａｃｔ１（前書き）

注意

１・フィクションです

２・原作ファンの方、怒らないでください

３・更新が遅くても、怒らないでください

４・読んでほしいです。読んでください

シンデレラ　act1

こんにちは。
私はシンデレラ。
多分、初めましてではないはず。
どうせ、一方的に知られているのだ。あまり、いい気はしない。知らないうちにメアド知られるようなものなのだ。
昔の私だったら、読者にバケツの水をぶっかけているけれど、今はそうはいかない。なんと言っても、お姫様になってしまったわけだから。
お淑やかに、と城で散々言われてる。煩わしいったらない。
でも、そこで王子の出番。私にベタ惚れの彼は、絶対的に庇ってくれる。可愛いは正義って、あれはきっと本当だ。

さて。
もうわかっていると思う。
「童話と違くね？」
そのとおり。
あえて言おう。あんな綺麗事、この世に存在しない！
私を愛しすぎた王子が無意識に脚色した話をしたのか、ノンフィクションライターだと言ったあの男による印税の為のものか。
もう、どうでもいい。
ただ、せめて私は真実を語ろうと思う。

「反省しなさい」
「…」

昨日、私は高価な壺を割った。正確に言うと、妹が割った。
「あの子はまだ小さいんだから、お前が世話をしなくてはならないと言っただろう」
「…」
私には妹が二人いる。母も二人…というわけではない。この国は一夫多妻制ではない。今の母が二人目であるだけだ。

私の母は大財閥の娘だった。そして父は財閥の息子。彼らを結びつけたのは、義務とも言うべき結婚。そして、産まれた私、つまりシンデレラ。もちろん、立場は母が上。
しかし、母の実家は簡単に破産する。父の実家は、内心、舌打ちをしただろう。
しかも、理由は不正が見つかったから。手を組んだ直後に相手が世間への印象を悪くしたのだから、嫌いにもなる。
しかものしかも、母の性格が悪いと来た。
彼女は不倫をしており、その果てに離婚。ただし、娘は夫に託し、ついでに会社の借金やらも託し、年下との新婚生活を始めてしまった。
父も数年後に再婚した。今度は恋愛結婚。双子の娘にも恵まれた。
一方、今年で十五となる私は…。

「返事をしなさい」
「うるっせえ、クソ親父！」
反抗期、真っ只中。
「壺くらいでゴタゴタと、そんなんだから会社の売り上げが伸びないんだよ！」

生まれながらに、容姿端麗。十になるまでは金持ちの一人娘として英才教育を受けたからか、頭脳明晰。私は、なかなか出来た少女だった。

それが、仇となった。
父としては、私の存在は邪魔でしかない。けれども、優秀さは目につく。
自信過剰と突っ込まないでほしい。誰一人、私を攻められる人はいないと思う。結局、人間というものは自分を過大評価するし、自分を一番愛するのだ。
そういうわけで、私は邪魔者であった。が、実の娘にあからさまな、心からの嫌悪を向ける父親は少ないだろう。
反抗期でもある厄介な少女の扱いに、父は単純に辟易していたのだと思う。

こんな日常が、一転するとは、私は夢にも思わなかった。

シンデレラ　ａｃｔ２

秋のある日、感謝祭が開かれた。
農業が活発なこの国は、豊作になった年に祭が行われるのだ。神に感謝する、国全体の大行事。城が開かれ、市民たちの出入りも可能になる三日間。

その一日目。
父は義母と双子の娘を連れ、祭へ出掛けた。私はというと、一番近くの屋台にだけ行き、大量のカボチャを買ってすぐに帰ってきた。
今はお菓子作り中。パンプキンのパイにプリンに、パウンドケーキ。考えるだけで楽しい。家にある食材を使い果たすという、ささやかな反抗でもしてしまおうかな。
それにしても、父は農民ではないのだから祭に無関係だろうに、何故、出掛けたのだろうか。まあ、どうでもいい。

とにかく、私は気分がよかった。

…母方の祖母が来るまでは。

「やだわあ！
シンデレラったら、そういうものは料理人にさせればいいのよ！
それに、何故、王城に行かないの？
今はね、騎士たちによるトーナメントが行われているのよ。夜にはダンス・パーティーの会場になるから、上流階級しか出入りが出来なくなるでしょう？
ああ、少し前まで、私たちもそこに出入りが出来ていたのに。破産しなければ、今年だって…」
「お言葉ですが、私は出入り出来ます」

「……へ？」
「そちらの財閥と手を切ってから、父が立て直しを成功させたので。父に引き取られている私には、行く権利があります」
「……チャンスよ」
「はい？」

一時間後、私の髪は祖母に引っ張られている。
「痛い痛い痛い抜ける抜ける！」
「抜けないわ、まだ若いもの！」
祖母は私にとびきりめかしこんで城へ行くよう、行った。そして、王に気に入られるよう。
恐らく、自分の財閥に対して国の援助することを狙っているのだろう。
無理矢理風呂に入れられている間、不可能だと説得したが、無駄だった。無理矢理上等な服を着させられている間、夢語りだと言ったが、聞いていなかった。
祖母は財閥の娘として生まれ、大財閥の娘として育った。そして、大大財閥の娘として死ぬはずだった。未だにお嬢様の心を亡くしていない。私がスラングを使えば、泣き喚いて怒り出すだろう。また、あの立ち位置に戻りたくて仕方がない祖母。
…だからと言って、行使はどうかと思う。
「さあ、髪を綺麗に結いましょう。そして、貴女を馬車で城に連行するわ！」
「今、連行って仰いましたか」

私は、抵抗した。
死ぬ気で、した。
「ああ、もう、今の貴女に馬車は無理ね！」
そう言うと、祖母は私を担いだ。
「でも、何がなんでも連れていきますからね！」

そういうわけで、午後の９時、私は王城に着いたのだった。

シンデレラ　ａｃｔ３

私は城に着いた。

が。

「あああああぁぁぁ！！」

「おばあさま」

「担いで来たから、靴を忘れたあああああぁぁぁ！！」

「おばあさま」

「孫が、セスティ財閥の孫が、芝生の上に素足で立っているなんて、あり得ないわあああああぁぁぁ！！」

「おばあさま」

「いやあああああぁぁぁ！！」

「誰だ！」

急に鋭い声がした。

警備隊の兵士がこちらを見ていた。

貴族の子息である騎士と違い、兵士は庶民の出である。その分、情と血の気に満ちている。紳士的態度は皆無。

気付かれないよう、最悪、と呟く。

「私は、ダンス・パーティーに来た者です」

仕方なく適当に、嘘とも言えないことを言う。

彼はねっとりと私を見た。

「確かに、そのような形をしているな。けれど、裏庭にいるのはおかしい。他の出席者は正門から入り、案内されて中庭で寛いでいるぞ」

「ええ。私もそこに案内されましたわ。それから祖母と、少し散歩

を」
「一人じゃないか」
「へ？」
気付けば、祖母の姿はない。
あのババア、とまた気付かれないよう呟く。
「祖母とやらは消失の魔術の使い手か」
彼がニヒルに笑い、カチンと来た。
「ええ。そうですわ！」
相手は、クックッと笑い出す。
「パーティーに出席するほどの上流階級の娘の祖母が、魔女だとはね。王様に報告して、火炙りにでもしなくてはなあ」
「ぜひ、してくださいな」
「は？」
「どうかされましたか。何か空耳でも？」
「ふ、まあいいよ。来い」
彼はスタスタと歩き出した。
「え、捕らえないの？」
「面白そうだからな」
彼は帽子を被り直しながら、犬のような目で私を見た。
「パーティーに出て、王族と会話でもすればいいさ。生憎、俺は城内の警備隊ではないから、お前の様子を笑うことは出来ないが。あとで噂に聞くくらい、派手にやってくれよ」
私は戸惑った。捕まらないのは嬉しいのだが…。
「私、靴がないのよ」
いたずらっ子のように笑う彼が、人差し指を立てる。
「俺の爺さんは、移民なんだ。だから、少し異国に詳しいんだよ」
「ふうん。それで？」
「１つ、物語を教えてやるよ」
暫く茂みを進むと、灯りが見えた。王城は、ここだけで小さな世界

だ。広すぎる。
「中庭は、ここさ」
「ありがとう。思ったより親切な兵士さんね」
「ああ。なんか懐かしい匂いがするんだよ、あんた。家の匂いがする。久しく帰っていないんだよ」
「帰ればいいわ。お母様がアップルパイでも焼いているわよ」
「うちはパンプキン派なんだ。…あ、そうか」
兵士がニヤニヤしながら指差す。
「あんた、パンプキンの匂いがするんだよ。自分で料理でもしたのか。やっぱり貴族の子女ではないね」
「いいえ。貴族の子女よ」
一応、事実なので言っておく。
「じゃあね。いい夜を」
「ああ。いいパーティーを」

シンデレラ　act4

幻想的な雰囲気。現実から切り取られた、優雅な空間。
煌めくシャンデリア。それを凌ぐほどに、煌びやかな衣装と育ちから来るオーラを纏った人々。
重なる談笑も、落ち着いた声が混じり会えば、雑音にはならない。

「ご来城の紳士淑女の皆様。本日は感謝祭の始まりの夜を、共に祝いましょう」

王の言葉と共に、演奏が始まる。
人々は手を取り、思い思いに踊り始めた。
足を動かす彼らに対し、私が動かすのは口と内臓である。幾種もあるチョコレートケーキを完全制覇すべく。
一際大きな円を作り、王子は人々と会話をしている。知性を感じさせる微笑みが、人垣の隙間からチラリと見えた。

「好みじゃないなあ」
「え、おいしいよ？」
「うん、おいしい」

驚いて、声の元を見る。斜め下、そこには二人の少女。
双子の義妹だった。

「ケーキの話ではないのよ」
「そうなの？」
「何なの？」
二つの瞳に真っ直ぐに捉えられる。子守りは嫌いだが、彼女たちのことは嫌いではなかった。

「内緒です。ほら、お父様とお母様のところにお帰り」
「お姉様、話し方が違うよ」
「何だか、気持ち悪いよ」
「そんなことないだろうが」
「あ、戻った」
「よかった」
「次の曲に入るまでに、戻りな」
「次の曲は、王様たちも踊るんだよね」
「お姉様。同い年だし、王子の相手でもしたらどう？」
「まあ、私ごときが。そんな大役、滅相もない」
「また気持ち悪いよ」
「でもお姉様なら大丈夫だよ」
「確かに。お姉様、頭はいいし、美人だし」
知っているっつーの、と心の中で返した。
「そんなにケーキを頬張っていなかったら、きっと、この曲でだってダンスの誘いがあったよ」
わかっているっつーの、と心の中で返した。

王子より、柱の辺りにいる騎士の方が好みなんだけど。でも、警備隊にお誘いをしても無駄だし。そもそも女性から誘うのは、駄目だろうな。まあ、大人しくしていれば、誰かしらに誘われるだろう。
私は柱の近くに立っていた。数人、こちらをチラリと見たが、去っていく。
気付いた。
私と釣り合う年齢の貴族の子息は、大半が既に婚約者を持ち、その相手とここに来ているのだ。つまり、ダンスの相手も決定済み。
当たり前だが、私に婚約者はいない。父の財閥は、妹のどちらかが継ぐのだから。
酒でも仰ってしまおうか。そう思って、一歩、踏み出しかけた時だった。

「お一人ですか？」

茶髪、同色の瞳。明らかに高級な着物。完成された礼儀。

「美しい人。よろしければ、次の曲を僕と踊っていただけませんか？」

知的な微笑。

王子だった。

シンデレラ　ａｃｔ５

鳥肌がたった。正直に言うと、私は王子の態度に引いていた。
美しい人？
なんてクサイ台詞！
金髪碧眼ならば、美しいと言うのか。それとも、女性全員か。それなりの美人だと自負しているが、面識のない人に口説かれるほどとは思えない。
そもそも一国の王子たるもの、身元も不明な相手に気軽に声を掛けるべきではないだろうが。

しかし、ロイヤル・ファミリーの誘いを素直に断ることが出来るはずもない。
何て言おう。
何て言おう。

「謹んで、お受けいたします」

こうとしか言えないに決まっているだろうが！

踊り始めたとき、王子が言った。
「名前を尋ねてもよろしいですか」
答えようとして口を開きかけて、止める。あの兵士との会話が思い出された。

『あんた、名は？』
『シンデレラよ』
『シンデレラぁ？』
『何、笑っているの』

『それ、異国じゃ灰かぶりの意味だぜ』
『は、灰かぶり？』

王子だ。気持ち悪い台詞を吐く、好みでない男性だとしても、この人は王子。国交もしているはず。灰かぶりという意味を知っているかもしれない。

『どうしてくれるの。そんな意味を知ったら、もう名乗れないわ』
『大丈夫。何処かの国に、いいかわし文句があるんだ。名前を聞かれたら、こう答えろよ』

「な、名乗るほどのモンじゃ、ございやせん」
「え？」
ああ、消えたい。
消えてしまいたい。
そして、靴を履いていないせいで足が痛い。
「今日は、どのようにしてこちらへ？」
「も、もちろん馬車ですわ」
祖母に担がれて、など言えない。
「貴女は、温かい香りがしますね」
カボチャです。カボチャの匂いです。
そんなに染み付いているのだろうか。
「何の香りだと思います？」
温室育ちには、当てられるまい。違う答えを言ってもらい、それで通そう。
「そうですね。まるで」
「まるで？」
「パンプキンのような」

ビンゴオオオオォォォ！！

どうしよう。
ええと、ええと、ええと。
「シンデレラ」
聞き覚えのある声が、ダンスを中断させる。
絶句している父だった。

うわあああぁぁ！

私は元妻の娘、つまり邪魔者。家で留守番しているかと思いきや、王子に手を取られている。
脳内はパニックだ。父も、そして私も。
「こちらのお嬢様の父君でしょうか」
暢気な王子の声に、ただ苛立つ。
父は私を上から下まで睨み、下で視線を止めた。再び顔を見て、口の動きだけでオマエと伝えてくる。
絶対に、靴を履いていないことに気付かれた。
どうしよう。怒られるだろうか。嫌だ。
無理矢理連れてきた、祖母のせいだ。ダンスに誘った王子のせいだ。

ああ、もう！！

私は、王子を突き飛ばして駆け出した。

シンデレラ　act6

「あの！」
と、王子が叫ぶ。
「嫌ッ、追ってこないで！」
と、私も叫ぶ。
「王子に対して、何たる無礼だ！謝りなさい！」
と、父も叫ぶ。

私、王子、父の順でパーティー会場を扉に向かって爆走中。

私は扉を両手で押し開けた。
闇がある。この城の喧騒と対称的な、夜の静寂だ。
長い階段がある。その先には、整備されているものの、城にしては綺麗さの足りない道。さらに先に木の門。どうやら、裏門に続くらしい。
よし、出れる。
私は勢いよく駆け降り始めた。
「待って下さい！」
「待て、シンデレラ！」
後ろで呼ばれている気がするけれど、気にするな。
「あら！シンデレラ！」
横でも声がするけれど、気にす…。

へ？

「お、おばあさま！」
「抜け出してきたの？駄目じゃない。あら、でもあそこにいるのって王子？王子よね？貴女を追いかけているみたいよ？もう！流石、

私の覚醒遺伝！」
どうしよう。王子のもとへ行けと言われるに決まっている。どうしよう。
「ほら、早くお逃げ！」
「お言葉ですが…え？」
「去るものは追いたくなるのが人間というものよ。ましてや、王子。逃げられるなんて経験はないはず。印象を残すの。貴女を忘れられなくなるようにね。そうすれば、あとはその外見を最大活用して、ゆくゆくは、フフフ」
涎を滴らせんばかりに語る祖母に、恐ろしさを感じる。
しかし、逃げろと言われているのだから、この幸運を使わない手はない。去るものはどうのこうのと言っていたが、そんな古典的な恋愛技術に引っ掛かる者などいないだろう。
私は再開して、駆け降りる。

「待って下さいッ！！」

後ろで一際、凛とした声が響いた。つい、振り返る。父もその声に反応したのか、きょとんとした顔で王子を見たまま停止している。逆光で彼の顔が見えない。

「僕と婚約してはいただけませんか？」

さっきの声に比べ、あまりに静かな言葉だった。
プロポーズ。多分、これってプロポーズだ。初めて言われた。

……うわ。

恥ずかしさから夢中で駆け出した。追ってくる気配はなかった。
それでも速度を変えずに走る。

体当たりするように裏門を開ける。
「貴様、何者だッ！！」
急に腕を掴まれた。しまった。裏とはいえ、警備隊が門に立っていないはずがない。
けれど、逃げたい。早く立ち去りたい。
「離してよ！」
「あ、灰かぶり…？」
「へ？」
警備隊の顔を見る。それは、私を中庭まで案内した、あの兵士だった。
「なんだ、期待を裏切らない奴だな」
「ね、一生のお願いよ。逃がして」
「ふうん。じゃあ、今度、俺の願いも聞けよ？」
「わかったから！逃がして！」
「あ。暗くてわかんなかったけど、お前、顔が赤いんじゃ」
「離せっつってんだろーがよ！！」
私は兵士を振り切り、夜の闇の中を、当てもなく走る。

シンデレラ　ａｃｔ７

これは私が去った後の話。
後日、聞かされたものだ。

「お、王子。娘がこの度は大変な無礼を」
「始めは面白そうな人がいるな、と思って近付いたんです」
「へ、あ、はい」
「彼女、靴を履いていないようでしたから」
このとき、気付かれていたのか、と父は内心で呟いたという。
「靴ならば、履いていましたよ」
そう言ったのは祖母だった。そこで初めて二人は祖母の存在に気付いた。
「誰だ！」
叫んだのは父だった。どうやら、元姑であると気付かなかったらしい。夜の闇の中だし、相手には何年も会っていなかったのだから、当たり前だ。
「誰でもいいでしょう。ほら、そこの階段、丁度七番目辺り。靴がありますでしょう。彼女の足から脱げたものですわ」
階段には確かに靴があった。月光を浴びて輝く靴。
それはもちろん、隙をみて祖母が置いたもの。
「なるほど。彼女の欠片ですね」
王子は、父に向き直った。
「父君に挨拶もせず、求婚した無礼をどうぞお許しください。しかし、この想いは誠実なものです。どうか、ご理解ください」
「い、いや！そんな！お顔をお上げください！許しますし、理解しますよ！ええ、もちろんです！」
祖母はニヤリと笑ってガッツポーズをした。
「それにしても、始め、靴が見えなかったのは何故だろうか」

祖母が口を開きかけたとき、低い声が響く。兵士だった。
「その靴は、持ち主に恋した人にしか見えないのですよ。現に、私どもには見えませんから」
「え？私には見え…」
言いかける父の脇腹に、小石が突き刺さる。そして、黒いオーラを纏った兵士の微笑。
「そうか。やはり、私は彼女と婚約したい。どうにかして、再び会いたい」
「はっ。直ちに手配いたします」
「あ、その前に」
「はい？」
「そこの物陰にいる者、何者だ？」
祖母はビクリと震えた。王子と父からは死角だが、兵士にはその姿がしっかりと見えていた。
彼はクスリと笑ってから、王子に告げた。
「もういませんが、魔女ですよ」

「感謝するけれど、あの言い訳はないんじゃないかしら？」
「先に消失の術を使ったのはあんただろう？」
「何の話よ。それに靴の言い訳も、だわ。わざわざガラスの靴にしたのに。見えなかった理由になるように」
「あんな機能性のない靴、よく売っていたな。あの言い訳は異国の物語をもとにしたんだよ。もとは、少女の靴じゃなく、王さまの服だったが」

「それにしても、シンデレラ、どうやって来たのだろう」
「ともに馬車で来たのでは？」
「我が家には馬車はありませんよ？」
「ふっ。やはり魔女の力でしょうか」
「それにしても、魔女の声に聞き覚えがある気が…」

「パンプキンの匂いにガラスの靴。不思議な人ですね」
「パンプキン？カボチャの馬車にでも乗ったのでしょうか？なんて」
「カボチャの馬車！なるほど！」
「え、王子？冗談ですよ、ね？あれ？」

シンデレラ　ａｃｔ８

遠くで城の鐘が鳴り響いているのが聞こえた。
布団に埋もれて、考える。
もしもノックの音が聞こえたら。
選択肢そのいち、父。
きっと激怒だ。王族に対してあの態度はない。あれはやり過ぎ。謝ろう。いや、無理かも。父の顔を見るだけで苛立つ。反抗期とは厄介だ。
そのに、祖母。
その場合は、今後いかにして王子をオトすか熱弁するはずだ。そうなったら、私はもう黙って聞いていよう。
そのさん、王子。
うわっ、嫌だ、この選択肢は嫌だ！だって、だって…。

コンコンッ。

の、ノックの音！
恐怖の音がああぁぁ！
相手は？正解は？
「よお、灰かぶり」
そのよん、兵士が正解だったらしい。
私は少し安心してドアを開ける。

そして、閉めた。

「なんで閉めるんだ！王子がいるんだぞ！無礼だと思わんか！」
「お義父様、落ち着いて下さい」
「おおおおお義父様！？」

ああ、父も王子もいる！
「灰かぶりさん、開けてくださいよ」
「なんで連れて来たのよ！」
「開けないつもりであるようにお察しします。では」
兵士は蹴りで無理矢理ドアを開けた。王子がいても、変わるのは口調だけで態度は変わらない。清々しい兵士だ。
勢いで私は尻餅をつく。王子が駆け寄ってきた。
「お怪我はありませんか？」
紳士だ。有り難い気遣いだ。けれど、理想ではない。もう少し、かっちりとした人が私の好みなのだ。
ああ、本当に嫌。王族というものは、何故、敬わなくてはならないのだろう。面倒な世の中だ。とりあえず、敬語で喋ろう。
溜め息を吐いていると、急に目の前に靴が差し出された。腕を辿るように兵士を見ると、妙な笑顔をしていた。
「はい。忘れ物ですよ」
「へ？何ですか、このガラスの靴。見たこと…」
「貴女が履いて来た靴ですよね！そうですよね！！」
何ですか、この流れ。
「あれ？」
「どうかしましたか、王子？」
「君も父君も、今、その靴が見えているのですか？」
「はい。そうですが」
「……あ」
王子は不思議そうで、父も不思議そうである。兵士だけが眉をピクリと歪ませた。
三人の会話の意味が、私には全くわからない。
「解けたんです！」
兵士の大声に耳がキィンと鳴る。
解けた？
「解けたって何がですの？」

「白々しいですね。灰か、いや、ミセス・シンデレラ。魔法ですよ、魔法。いいんですよ、隠さなくても。もう王子は知っていますから」
魔法？何が？
「十二時の鐘が鳴った瞬間、私たちにも見えるようになりました。ね？」
兵士の威圧的な視線に負け、父は頷いた。あの顔を見る限り、理解はしていない。
「日付を越えられぬ魔法か。だから、僕から逃げたのですね。解けた後の姿を晒さぬよう。そんな必要ありません。僕の想いは、ほら、日を越えても変わりません。この先、何年経っても！」
王子が一人で盛り上がる様子を、私はただ唖然と見ていることしかできない。

シンデレラ　act9

「さあ、共に城へ。父上や兄上に、貴女を紹介したい。そして、婚約パーティーの計画を練りましょう。とびきりのドレスを手配しましょう」
王子が手を差し出してくる。所作の優雅さには感動できるが、その誘いは歓迎できるものではない。
まだ私は答えを出していないのに。
目が勝手に泳ぐ。兵士と視線がぶつかる。彼は私に当て付けのように強く鼻息を鳴らす。それから瞬時に表情を操り、笑顔で王子に言った。
「王子、彼女は玄関先で部屋着で話しておりました。体が冷えているように見受けられます。私がホットミルクでもお作りしてから、お送りいたしましょう。
王子はひとまず、城に帰るべきです。ロイヤル・ファミリーがパーティーを抜け出してはなりませんから」
「ああ、その通りですね。君に任せることにしましょう。では、ミセス・シンデレラ。ご自愛を。必ず、また会いましょう」
「あ。私も戻ります。妻と娘たちが、まだパーティーにいるのでね」
王子と父が去り、私と兵士だけが残った。

「一体、何なのよ！」
ソファーに寝そべる兵士に怒鳴る。
「何なのよって、何だよ。最初に会ったとき、面白そうだから見逃すって言っただろう？さらに面白くしようとして、何が悪いんだ」
「私は見世物ではないわ！」
「我ながら嘘をポンポン並べた。そのことは謝罪するさ。けれど、王子との婚約だぜ。幸運じゃないか」
「結婚は女にとって大問題なのよ！」

「満更でもないくせに。王子を見て、赤くなっていたぞ」
「それはプロポーズにドキッとしたからよ！」
「やっぱりドキッとしてんじゃん。それなら、すぐに好きになるさ」
言い返そうとして、やめる。
どっちにしろ、私に拒否権はない。王族に対する否定は、クーデターしか存在しない。
つまり、絶対的に私は王子と婚約する。
「あ、でも王様が許さないかも？」
「いや、あの人は第三王子だから結婚相手は選べるはずだよ。しかも、お前の父親、あの人なんだろう？つまり、財閥の娘。良いに決まっている」
「嘘でしょー…」
一応、十五の少女だ。まだ、運命とか、夢を持っていたのに。
「迷う前に結婚しちまえよ」
信じられない台詞を吐いてから、彼は盛大に笑い出した。
「何よ、それ！」
「でもさ、王子視点で考えろよ。あの人は、お前を逃したら恋愛結婚はできないと思う。実際、上の兄二人は政略的に婚約済みだ。せっかく割かし自由な第三王子なんだぜ。あの人には、損得が先立つ結婚をしないでよくしてやりたいじゃん」
そんなにだらしない姿で、いきなり正論を言わないでほしい。

『迷う前に結婚しちまえよ』

『僕と婚約してはいただけませんか？』

深呼吸をする。
「うん、そうだね」
「何か言ったか？」
「別に。てか、ホットミルクは？」

「作るわけねえだろ」

シンデレラ　ａｃｔ９（後書き）

次回のａｃｔ１０でシンデレラ編は完結です。

シンデレラ　act10

婚約パーティーの日。
ドレスアップされた私を見て、王子はうっとりとしている。
「美しいですね」
「ありがとうございます」
うわあ。そういえば、これからは敬語の毎日か。キツいなあ。
「あら、何か持っていらっしゃる？」
「気付きましたか」
嬉しそうに、彼は箱を差し出した。中には、いつかのガラスの靴。
「せっかくですから、今日、これを履いてはいただけませんか？」

アホかあああああぁぁぁ！！！！

ガラスだぞ？
転んだら割れて、破片が足に刺さるではないか。妻を殺したいのか、
え？

「駄目、ですか」

……うっ…。

前も感じたけれど、子供っぽいこの王子がたまに出す静かな声は、
何故か心臓に直接的に届く。
ドキドキする。
「は、履きますわ」
私は足を静かに上げる。爪先がガラスの冷たさにピクリと震えた。
初めての感覚に戸惑いながら、足を滑らせるように入れていく。

止まった。
「へ？」
「どうやら、サイズが合わないようですね。一回り、靴が小さいようです」
恥ずかしい。服が入らなくなることよりはましだが、それでも入らないというのは恥ずかしい。王子の紳士的態度が拍車をかけて恥ずかしい。
「消えたい…」
「では、また魔女に消失の術を使っていただいたら如何でしょう？」
驚いて声の方を見るとドアの所に兵士が、否、騎士が立っていた。
「あ、あなた」
「失礼。王子、ミセス・シンデレラ。用意が整いました」
笑顔で近付いてきて、彼は伝える。さらに私の耳元で囁いた。
「感謝するぜ、灰かぶり。王子がぞっこんのお姫様の一言で、兵士から騎士に。有り得ない昇進だよ」
「本当に意地の悪い人よね。願いを聞けって言ったときから、これを目論んでいたんでしょう？」
ニヤニヤと笑う彼を見て、溜め息を吐いた。
「王子。その靴は捨てるには惜しいですし、彼女の双子の妹に届けましょうか？」
「それはいい。それにしても、足の成長は早いんですね」
「いえ。ここにいらっしゃるミセス・シンデレラが、あの宵の女性ではない可能性がありますよ」
そう言ってまたニタニタと笑う兵、いや、騎士。
「あるはずないでしょう！そんなことより、広間にベタベタ付いている足の指紋の方が確証だわ！」
あ。つい大声が。

王子がパチクリとこちらを見ている。
「ということは、あのとき、やはり素足だったのですか？」
あ。
言い訳を考えてオロオロしていると、王子はクックッと笑い始めた。
「本当に面白い人だ」
「いや、その」
「これからの王城生活も面白くなりそうですね、王子」

この世界の何処か。
少女の足下、はたまた未来で出会う誰かの手元。
ガラスの靴は輝きながら、次の極上の嘘を待つ。

―Ｈａｐｐｙ　Ｅｎｄ―

シンデレラ　ａｃｔ１０（後書き）

これにてシンデレラ編は完結です。お付き合い、ありがとうございました。
よろしければ、感想などをお願いします。
このシリーズはまだ続きますので、今後もぜひチェックを！！

白雪姫　act1

俺は机の上の作品を眺めている。それは丁寧に重ねられた紙。
暫くすれば、ここに記された物語が、創作物として世に出回るだろう。子どもたちは、そのロマンスにキラキラとした目を見せるだろう。
しかし、それは、それこそが嘘、つまりフィクション。
この話にはモデルとなった出来事がある。だが、児童文学作家である俺は、世の中の出来事を綺麗にしなくては伝えることが許されない。故に、脚色は必須だった。結局、フィクションができあがる。とはいえ、一人の人間として、事実を伝えたいという直球な気持ちが、俺の中にはある。

記せないのなら、せめて語ろうか。
さあ、嘘が出版される前に。本当の白雪の物語を。

穏やかな朝。
目を擦りながら階下に行くと、エプロンをつけた兄が、鼻唄を歌いながらハニートーストを焼いていた。
気配を感じたのか、彼は一瞬で振り返り、両手を大きく広げる。しかし、俺の姿を確認すると明らかな落胆を見せた。
「何だよ、兄貴」
「ちぇ。お前か」
「残念でした。それにしても毎日のことながら、エプロンが様になっているじゃないか」
「家事を任されてから長いもんでね。我ながら、料理の腕はプロフェッショナルだよな」

王都を東に行った、とある街。その一軒家に、俺たち兄弟は暮らしている。父母は劇団に所属しており、それが王都の民衆になかなか好評なものだから、二人は息子たちを放って演劇三昧。おかげで、長男である彼は有能な主婦と化している。不満はないらしい。どうせ、彼は自室で研究と発明を繰り返す毎日であるから。

席に着いて、新聞に目を通す。王女のゴシップがあった。曾祖母が魔女であるという噂があるらしい。

王女の名はリリー。王都の人々の名は、ここと随分と違う。俺が風名（ざな）であり、兄が葉羅（はら）であるように、この辺りは名付け方が古風なのだ。

いい匂いがした。気付けば、兄がコーヒーを注いだカップを持ってきてくれていた。

彼は、できた兄である。一点を除けば。

再び物音がした。

こちらへ向かう、寝惚けた足音。それに反応し、兄はコーヒーカップを放り投げた。

「あっつ！ちょ、兄貴！」

足音の主に今度こそ大きく手を広げる。果たして、彼の目当ての姿はあった。

「妹よ、おはよう！今日も愛らしいな！お兄ちゃん、再会の朝を待っていたよ！」

兄からの過度な愛に無気力な欠伸で応え、俺たちの妹である白雪（しらゆき）は、そこに立っていた。

こんな日常を賑やかした出来事は、兄の発明品が出来上がった日から始まる。問題となったそれは、何てことはない一枚の鏡だった。

白雪姫　act2

自室にて、次に書く物語を夢想する。子どもの好む希望の世界。
閃くものがなく唸っていると、いきなりドアが開いた。
「風名！」
兄貴だった。大概、こういうときに言い出すのは天才的な発明品が出来上がったということ。そして、やはり彼は言った。
「史上最高の発明品が出来たよ！」

「で、これがそうだと？」
「そう！！」
それは、ただの鏡に見えた。何処にどんな機能を搭載したのか、全く見当がつかない。特に気にはならなかったが、彼が説明をしたそうにウズウズとしていたので促した。
「会話機能を搭載したのさ」
「会話機能を？」
鏡とは、姿を確認する為の、女性特有の、小さなエチケットだと思う。そんなものに会話機能が必要だろうか。会話する必要性もないし、そもそも鏡に映す以外の役割を期待している人は少ないのではなかろうか。
「風名、君の考えはわかるよ。この鏡が売れないのではないかとか、考えているんだろう」
「まあね」
彼は自作の発明品を売って、生計を立てている。研究と発明は彼の趣味でもあるが、仕事として成り立たないことには生きてはいけない。買い手の見つからないような発明品は、意味がないのだ。
理想を唱えるが本当は現実を見ている彼が、技術は足りているはずの彼が、プラスにならない発明品を作ったことが不可解だった。
「これも売るんだろう？」

「そうだよ。作品に愛着はあっても、執着はないからね」
「じゃあ、もっと売れるような実用的なものを作りなよ」
「違うんだよ。今回は王都で売るからなのさ」
「へ？」
「利便性の増した既製品を求めるのは、結局のところ、庶民。けれど、王都で演劇や宴に乱舞するブルジョアは、下らなくて珍しいものが好きなのさ」
「この鏡は、王都のブルジョアの幼い心を捕まえるために、下らないってこと？」
「そう。彼らは、まずはコストを考えず、自分の物差しでお金を差し出して来るじゃないか。彼らのポケットマネーは、こちらの考えていた原価を越えるからね。価値を理解してくれる庶民に売るのも好きだが、ブルジョアの顧客を作るのも、利益のある一興さ」
楽しげに語る彼を、俺は怪訝そうに眺めていた。

しかし、彼の言うことは正しかったのである。
結果的に、この国一番のブルジョアを捕まえてしまったのだから。

それから数日後。
「風名！」
既視感を与える登場をした兄貴は、原稿に必死に向かい合う俺を気遣う余裕もないのか、そのまま大声で続けた。
「例の鏡の買い手がついたよ！」
なるほど。嬉しい理由はそれか。
俺は大して期待もせず、社交辞令のつもりで尋ねた。
「ふうん。誰？」
両手を広げ、彼は嬉々として叫んだ。その答えを聞き、俺の筆は停止した。
「リリー王女さ！」

白雪姫　act3

「王都かあ、久しぶりに来たよ」
「折角だから、風名の次の作品の舞台にでもしたら？」
「ふむ、考えておく」
「それにしても、お兄ちゃん。息苦しいんだけれど」
「駄目だよ、白雪！せめて、そのくらいは防御しておいてくれ。君の愛らしさを晒せば、都中がパニックだ！お兄ちゃん、心配で心配で」

例の鏡を献上する為、兄貴は今日、王城へ行く。
気分転換に俺がついていきたいと言い、王都に行きたいと白雪がねだり、今に至る。

それにしても、と、俺は白雪を眺めて思う。
頭に布をぐるぐるに巻いた少女とは、如何なものか。この国で、こんな文化はない。ああ、そういえば、少し南に行った小さな国の宗教で、人々はこんな格好をしているのだっけ。放浪する少年の物語を描く為に調べたとき、そんな資料を見た覚えがある。その国名は、ええと。
「フォビリアの人間か？」
そうだ、フォビリア。

……え？

「そこの娘の形は、フォビリアの伝統だろう？」
かっちりとした体格の男が、そこに立っていた。五十代だろうか。
周囲の空気を独占するような存在感が、何かしらの身分を保証された人間のように感じさせる。

フォビリアのことを知っているのは、何故だろう。肌の色やイントネーションは、この国の人間のもの。つまり、移民や流浪の者ではないのだろう。小さな国を知っているということは、学者か、否、何となく雰囲気が違う。だとすると。
「おい」
声をかけた相手が自分だと察し、返事をする。
「何でしょう」
「どういう一行なんだ？」
「それに返答するのは、義務でしょうか」
「いや。個人的にお前たちに興味があるだけ」
「何故？」
「面白そうだから」
そう言うと、彼はニヤリと笑った。厄介だが、悪人ではないのかな。この人を何処にカテゴライズするべきか、判断しかねる。
「で、何処に行くのさ？」
「え、ああ。王城ですよ」
答えを聞き、彼はヒュウと口笛を吹いた。
「同じじゃねえか。これは、ますます期待できそうだな」
「貴方も城に、ですか。しかし、不審な方の言うことは信用性に欠けますね」
「人の真髄まで見破ろうと凝視する人間に、言われたくないね」
年齢を感じさせない口調。俺は、その男を見上げた。
ふと、後ろを振り向く。葉羅は、白雪を防御するように前に立ち、男に殺気を込めた視線を送っている。誰も彼女に手を出さないと思うが。こんな兄がいる限り。
「風名！とりあえず、行こう！こんな野蛮な男に白雪を近付けたくないよ、お兄ちゃんは！」
「ああ、はいはい」
「私は別に平気よ」
「駄目！絶対に！」

「おう。面白そうだな。付いていこうっと」
「来るなあああ！」
そういう訳で、予定より一時間遅れ、俺たちは王城へ到着した。

白雪姫　act4

豪奢な廊下を、リリー王女がいるという部屋まで歩く。先を行くメイドは、王城で働いているだけあって淑やか。次の作品に登場するヒロインのモデルにしようかと、俺は考えていた。
前を歩く葉羅は、白雪の両の肩に手を置き、キョロキョロしながらソロリソロリと歩いている。白雪はというと、もう諦めているのか、ただ黙って歩いていた。
ちなみに、不審であるうえ無礼であるという理由で、王城へ入る前に布を取られていた。彼女の白く清らかな肌が露になっている。
そして。

「お前の妹、なかなか別嬪じゃないか」

俺の隣を当然のように歩いている男が一人。

「煩いですよ。何故、着いてくるんですか」
「別にいいじゃないか。面白そうだったんだから」
王都の街中で偶然に出会った彼は、城まで同行しただけではなく、王女に献上する場所までも共に来ようとする。そして、それを誰も咎めない。
ちょうど訳がわからなくなって、いっそ彼を罵倒しようかと思っていたとき。
「こちらが、リリー王女のいらっしゃるお部屋になります」
こちらへ向き直り、メイドが言った。それから、その洒落たドアをノックする。彼女が言葉を続けるより早く、どうぞと、中から幼い声。メイドは丁寧にドアを開けた。

「ようこそ」

大きな室内に、小さな少女。歳は確か八つと聞いた。白雪と同じ。
見ただけで高価だとわかるドレスを纏い、無敵な笑みで立っていた。

「貴方が、ミスター・ハラ？」
「はい、プリンセス・リリー。この度は作品をご評価頂き、誠に光栄にございます」
大人びた口調で返答するも、彼の手は未だ白雪の肩の上。爽やかな笑顔を作っている彼の下で、白雪も状況を察し適当な微笑を浮かべている。
「そちらは、ご家族の方？」
一礼し、俺は名乗る。
「失礼しました。私は風名、葉羅の弟です。こちらは白雪、私共の妹です。呼ばれぬ者ながら彼と共に登城した無礼、ご容赦くださいますよう」
白雪と共に再度の礼をすると、王女はそれを途中で遮った。
「良いのです」
不思議に思った。俺の隣の男は、何も話していないというのに。王女を前にしても変わらない彼の飄々とした表情を見て、本当に何者なのだろうと、考える。
「それより、早速ですが件の鏡を拝見したいのです」
「はい、ここに」
葉羅は、片手を白雪から離し、ショルダーバッグに入れる。布にくるまれた鏡が、彼の手に置かれた。
「この鏡は、必ずや事実を答えるでしょう」
王女は、それを取った。やはり、冴えない一般的な鏡だ。
「では、尋ねてみようかしら」
王女が強気な笑みを見せた。
俺は唾を飲む。今までの所作を見て、王族の完璧さを思い知った。
同時に、幼いながらここまで完成されている彼女のプライドは、相

当なものなのではないかと予想していた。
鏡よ。どうか、世間を知っていますよう。どうか、トラブルを起こしませんよう。

白雪姫　act5

リリー王女は頬に手を当て、強気な笑みで話し掛ける。
「やはり、まずは試験かしら。当たり前のことからいきましょう。鏡よ、鏡。私の歳は幾つかしら？」
きっちり三秒後。
「お答えします。今年で九でございます」
……え。
俺と白雪は絶句した。しかし、制作者である葉羅と、知らない王女は変わらぬ表情。俺の狼狽を、隣の男だけが気にしていた。
王女は満足したようで、次々に容易な問いを投げ掛けては、返答に目を輝かせる。俺はこっそり葉羅の耳を掴んだ。そして、引っ張る。
「どうしてだよ」
「こっちの台詞さ、風名。耳が千切れる」
「あの声だよ」
俺たちの会話を、白雪と男が見守っている。一方は不安げに、一方は目を光らせて。
「あの鏡の声、白雪の声じゃないか！」
「うん。やっぱりわかるか、風名。流石だなあ」
「商品に、意味わからない小ネタを仕込むなよ」
「美声にしたかっただけさ。そうと言えば、白雪しかいないだろうが。我ながら、上手に再現できたよ。ほら。森の精霊さえ呼び起こす、雫のような澄んだ音！」
「あのさ、兄貴」
「何？」

「今ので不安になったから確認したいんだけれど、あれの答える正解は兄貴が入力したものなんだよな？」
「そうだけど、大丈夫だと思うよ。俺、割りと情報網は広いし、確かなんだ」
そうではない。そうではないのだ。
入力したのが彼だとすると、この鏡の価値観は彼のもの。つまり。
俺の思考を、はしゃいだ王女の声が中断させる。
「鏡よ、鏡。今年で九を数える者の中で、最も優れた者はどなた？」
きっちり二秒、かと思えば、一秒も置かず。

「お答えします。白雪でございます」

鏡の返答に、王女は停止。俺は立ち眩み。白雪は蒼白。葉羅は変化なし。男は震えて笑っている。
「……しらゆき……。うふ。しらゆきって、確か、そこのお嬢さんだったかしら？」
王女は長い前髪を垂らし、こちらをキッとねめつける。
「あ、あの、私は」
白雪が言い訳を試みるが、王女の迫力に敵うはずもない。理由には気付いていなくとも、空気は察したようで、葉羅も狼狽えていた。
状況の整理と打開策を同時に命じたせいで、俺の脳もパニックだ。
あ、本当によく似ている声だな、すげえや、と言う隣の男だけ苛立つほど能天気に構えている。
ああ、これだから妹を溺愛する人間の価値観で物を作るのは駄目なんだ。あの鏡が答える、美しい人も、聡明な人も、女神も天使も、全て白雪に決まっている。
「へえ。貴女がシラユキ。私より優れているという？」
「で、ですから、これは兄のミスによるものでっ」
王族に口答えは許されない。白雪に詰め寄る彼女を、俺たちは見ていることしかできない。

白雪姫　act6

つかつかと白雪に近付いてくるリリー王女が、今どんな顔をしているのか、わからない。何故かと言えば、もちろん怖くて直視できないからである。
歩幅が小さいのか早足なのか、小刻みな靴音だ。もうすぐ彼女に体当たりでもするのではないだろうか。
そう思っていたとき。

「やめろおおおおおぉぉ！」

響き渡る絶叫。葉羅である。うわ、と思った。忘れていた。この兄は妹を何よりも愛している。
「妹のきめ細かく白い肌に、傷の一つでもつけられると思うな！陶器のような白雪に、負のオーラをまとって触れていいと思うな！」
やってしまった。
白雪も王女も停止。俺は溜め息を吐き、男は笑いを堪えて震えている。
「白雪は、繊細で柔らかく、そして、驚くことに異常に可愛いんだ！」
ああ、終わった、と思っていたときである。

「激しく同意しますわ！」

王女は勢いよく方向転換をし、熱弁の為に宙をさ迷っていた彼の手をガッシリと掴んだ。

……え？

「白い肌と黒の瞳、見事なコンビネーション！コントラストは最大限に活かされています！さらには、あの鈴の音を思わせる美声！何ですか、妖精ですか、天使ですか！？ふ、ふふふ」
ちょ、ちょっと待ってくれないか。
「驚いたか？」
隣の男は、愉しげに言った。
「どういうことなんだよ？」
「馬鹿。見たままだろうが」
見たまま、ということは。手を握りあう男女。
「え、兄貴と王女で、身分違いのラブロマンス？」
「馬鹿。冷静になれっての」
「駄目だ。無理だ。ヒント、せめてヒントをくれ」
「ヒントか。そういうの苦手だから、ストレートに答えを言おう」
男は再び白雪に向かい始めた王女を指差し、言う。

「王女は」

「ああ、シラユキ。なんて愛らしいのかしら。もう王城で共に暮らしましょう。そう、それがいいわ」
「待て。王都は物騒だぞ。お兄ちゃんは許しませんっ！白雪も、お兄ちゃんと住みたいよなー？なっ？」
「あ、あの、二人とも落ち着いていただけませんか？それに、お兄ちゃん、王女様には敬語でしょう？」
「確かにハラの言う通り、不安がありますね。王都は人が多いもの。狙う輩が現れるかも。そうだわ、護衛をつけましょう！私に八人の護衛がついているから、そのうち七人をシラユキに！」
「それは名案かもしれませんね、リリー王女。しかし、いかなることをしようとも、この兄妹愛は揺らぐことを知らないのです！な、白雪、お兄ちゃんとずうっと一緒にいたいよな？なっ？」
「王女が声に対するフェチシズムが激しいとか、バイカが入ってい

るとか、辺境の村の発明家が発明品の声に凝っているとか。ゴシップ誌が、そのままですよ。…二人とも、正気に返って…」

「シラユキ、可愛い！」

「合唱しないでよっ！」

「王女は、少し変だ」

そんなことはわかっている。

白雪姫　act7

細く長い机に、真っ白な布が敷かれている。執事と思われる初老の男性が、白雪の座る椅子を引いていた。
彼女と角を挟んで、右に王女。左には俺が座り、その横を例の男、兵士、兄貴、兵士と続いている。

王女の部屋を出たあと、彼女は白雪を連れ、ひたすら城内を案内した。俺と兄貴と男は、その後ろを寂しく歩くのみ。ちなみに王女に掴み掛かろうとした兄貴は、二人の兵士に挟まれ、不貞腐れた顔で最後尾を歩いている。
「如何？城は退屈しないわ。こちらに住む気にはなりません？」
「私では、場違いでございます」
「そんなことないわ。料理も美味しいの。食べていくと良いわ」
そう言って、次にやって来たのがここである。

「今の時期なら、アップルパイが美味しいでしょう？料理長に作らせているから、もう暫く待っていて」
彼女の言う通り、調理中のようで、奥の扉の向こうから甘く優しい香りが漂ってくる。
いきなり、うお、と俺の隣に座る人物が声を上げた。
「どうしたんですか？」
「いや、懐かしくてな」
「何か、思い出すことでも？」
「昇進する少し前のこととか」
さらに質問を重ねようとしたときだった。
「まあ、おばあ様！！」
王女がそう叫んで、匂いの方へ駆けていく。
見れば、焼き上がったパイを老婦人が持っている。料理長には見え

ない。メイドだろうか。
……ん…いや、おばあ様？
王女の祖母！
「おばあ様がお料理を！？そんなことをなさらなくても」
「パイと聞いたら、思い出が疼いてしまったのよねえ」
年齢の割りに溌剌とした雰囲気がある。目鼻立ちがくっきりとしており、若い頃に見たかったと思わずにはいられない。
それにしても、王族も料理をするのだな、と俺は考えていた。彼女は、王子と恋愛結婚したとしてとても有名な人物。それ故に、良い噂も悪い噂も、巷を駆け回っている。けれど、少なくとも俺が今見る彼女は、好印象だった。
そんな彼女が、ゆっくりとこちらを向いた。
「こちらがミスター・ハラ、ミスター・カザナ、それとミス・シラユキですね。あと」
彼女の視線が、俺の隣の男で停止した。男はというと、ニヤリと笑って一言。

「老けたな、灰かぶり」

王族への暴言！しかも意味不明！
俺は恐る恐る彼女を見る。しかし、彼女は固まったままで怒り出す気配もない。
かと思ったら。

「黙りなさい、クソ兵士！！！！」

彼女は大きく振りかぶり、持っていたパイを頭上に掲げる。そして、そのまま男に向かって投げつけた。
空気を裂く音がする。男は見事に避けたが、パイはその後ろでベシャリと潰れた。横を過ったときに魅力的な香りがしたため、惜しく

て仕方ない。さぞ美味しかっただろうに。
一方、それを投げた本人は美しく微笑み、避けた男の襟首を掴んだ。
「失礼。ここの彼だけ、少し借りるわ」
残されたのは、俺と兄貴と白雪、王女、そして潰れたパイである。

白雪姫　act8

王女はキッチンへと向かった。
俺たち兄弟は、とりあえず見つめあう。
「何だったんだろ」
白雪が口を開いた。
「さあ。兄貴はどう思う？」
「白雪は可愛いと思うよ！」
話が通じない。
「兵士さん、あの男はどなたかご存じですか？」
隣の隣に姿勢よく着席する兵士に訊ねると、意外にも熱を帯びた口調で、知っています、と答えられる。しかし、説明を続けようとした瞬間に奥の扉から王女が戻り、彼は口を閉じてしまった。
「騒がしくしてしまって、申し訳ありません。祖母が、はしたない振る舞いを見せました」
彼女は自分の席に座る前に、白雪の前に林檎を置いた。切っていない、艶やかな姿。
「お詫びといっては、貧相ですが、こちらを召し上がって下さいな」
俺たちには、ないのか。
「アップルパイに使いきってしまったかと心配していましたが、何故だか、大量に残っておりましたので」
それは、そうだろう。俺は、パイが横を過った瞬間に気付いた。背後で潰れているあれは、明らかにパンプキンパイだ。
そのままの姿の林檎を前に、白雪は曖昧に笑っていた。切らずに、このまま齧れという意味だろうか。やはり、王族は包丁さえ持たないのかもしれない。
かと言って、拒否をすることも不可能。白雪の手はゆっくりと林檎に伸び、それを掴んで、控えめに齧った。
シャクリッ、と瑞々しい音。

そして、ガタン、と鈍い音。
白雪はテーブルに突っ伏した。
「白雪！？」
兄貴が立ち上がり、駆け寄る。兵士も、それを止めなかった。
脳が回らない。
今、何が起きた？
「ふ」
声が漏れた。その方向を見る。
王女だ。
ふ？笑った？
俺の訝しげな視線を感じてか、彼女はその場を制するように、大きく凛とした声を出した。
「落ち着いてください。彼女は、ただ寝てしまっただけのようですよ。休ませましょう。慣れない場所で歩かせてしまった、私の責任ですね。申し訳ございません。さあ、廊下の突き当たりの部屋が空いているはずよ、そこへ運んでさしあげて」
二人の兵士が素早く動き、白雪を抱き抱える。今ばかりは、兄貴も黙っている。ただ、おろおろと白雪の手を握るのみだ。名の通った発明家のくせに、変なところが女々しいんだから。
それにしても。
寝てしまった？
あんなに急に？
林檎を食べて？
確かに、様子を窺うに寝ているのは事実だろう。しかし、あんなにも急激なことがあるものか。
俺は王女を見た。たった九つの少女、きっと彼女が原因。

児童文学作家である俺は、とりあえず読者に対する価値観を更新しなくてはいけないらしい。
齧りかけの林檎を見た。恐らく、睡眠薬が含まれているのだろう。
白雪を少しでも長く城に滞在させたい王女、無闇に城から出られない王女。彼女の願望を強引に叶える、歪んだ方法。
最近の子どもは、どうやら幼くないらしい。

白雪姫　act9

同じ頃、隣の部屋で起こっていたことも語らなくてはいけない。登場人物としての俺はその内容を知るはずがないのだが、これは避け様のないフィクションの都合。
読者には、登場人物よりも真実を知る権利があるから。鳥瞰しなくては、物語は不完全だ。

「久しぶりだな、灰かぶり」
飄々とした態度は相変わらず。男の様子に、シンデレラは溜め息を吐いた。
「本当に、こんなに長い間、何処に行方を眩ませていたのよ。探したんだからね」
「かの美しき少女が俺を追うと考えるのは気分はいいが、今のお前が言っても、年より臭い執念しか感じないな。時とは残酷だ」
彼女はキッと彼をねめつける。
「今だって平均以上の美人よ」
高価な衣服に身を包み、既に王族の雰囲気に馴染んだようでも、根の性格は変わっていないのか。男は、それが何となく嬉しかった。変わってしまったのは、多分自分なのだろう。ほんの少し前、彼女は成り上がりの王女で、彼は成り上がりの騎士で。
懐かしい。
「魔女はどうした？…死んだか？」
「祖母のことだったら、そうよ。当たり前でしょう。今は、私がお婆ちゃんなのよ」
違う、と彼女は思った。本当は消えていた何年間もを追及しようと思っていたのだ。それでも、彼の態度は昔を思い出させて慕わしく、自然と会話へと転がってしまう。
「そういえば、最近のゴシップ誌で、私の母が魔女って語っている

ものがあったのよ」
「それはひどいな。間違いだ。魔女はお前の母ではなく、祖母だろうに」
「そこじゃないでしょうがッ！！」
彼女は再びの溜め息を吐く。
「あのね、私はね」
真面目な声。彼は怯んだ。
「本当に心配していたのよ」
「わかっているって」
「それが、こんないきなり」
「ああ、悪かったよ」
どうしようか。
彼は頭をボリボリと掻いた。美しい絨毯に、フケが散らばる。
去った理由を、言うわけにはいかない。プライドに反する。
黙り込んだ彼に何かを感じ取ったのか、彼から視線を外し、彼女は近くのソファーに腰を下ろした。
「いつかは話してよね」
「墓標に語ってやるよ」
「あんたが先でしょう」
「俺は長生きするから」
彼女が微笑み、彼は安堵をした。
それから、ふと思い出して言った。
「貧乏な庶民として、一言いいか？」
「何？」
「パイ投げ、反対」
「…あんたのせい」
「断固反対。無情王族、庶民の苦悩を知れ、バーカ」
彼女が拳を引いたとき。

「…あ。今、物音がしなかったか？」
「言い訳スか。騎士道は何処スか」
「本当本当。俺の聴力、なめんなよ」

『白雪！？』

今度は彼女にも聞こえた。
「……」
「……ほらな？」
「城に美人がやってきたら、事件は起こるのね」
「え？灰かぶりでも、事件は起きたじゃんか」
「灰かぶりって言うなあああぁぁ！！そして、私も美人だあああぁぁ！！」

白雪姫　act10

「ただの睡眠薬ですよ」
王女は言った。
「少しの間、眠っているだけです。心配しないでくださいな。今だって、ベッドの周りに護衛は七人も置いていますし。気に病む必要はありません」
「それを、是非とも、あっちで号泣している発明家に仰ってください。何故、私に言うのですか」
「あら。棒読みの敬語って、何だか変な感じがしますね」
含み笑いをする少女と向かい合い、俺は内心で辟易していた。
こんな八歳は、きっと、俺が無理して書いた希望だらけの物語を鼻で嘲笑うのだ。その光景が脳内に鮮明に描けて、舌打ちしたくなる。
おっと、いけない。子ども相手に。冷静にならなくては。
「まあ、彼に言ったところで貴女が殺されるだけですしね」
「でしょう？貴方は理性がありそうだから、話せたのです。何だか、感付かれていたようですし」
「あまりに、わかりやすかったもので」
さて、どうしようか。俺は考える。
白雪は多分、暫く眠ったままだろう。もともと、普段から睡眠が長いのだ。けれど、彼女を長くこの城に居させたくない。兄ほどではないとはいえ、俺も妹は大事だ。こんな可笑しな王女のもとに置きたくはない。
誰か、頼れる人間はいるだろうか。俺は目だけを動かした。
葉羅を見る。白雪の眠る部屋のドアを殴りながら、泣きじゃくっている。彼は、今は頼りには出来ないな。
王女を見る。話にならない。却下却下。
葉羅を宥めている兵士。いや、王女側の人間だし、信用に欠ける。
ふと、あの男の顔を思い出す。あの著名なミス・シンデレラに連れ

ていかれた、あの男。奴に期待をするのは間違いだろうか？

一方、シンデレラと元騎士は食堂にいた。

「あ、誰もいないのね」

「移動したんだろうよ」

彼女は、テーブルの中央にある椅子に座った。そして手を組み、背もたれに体を預ける。彼は、王族になって傲慢になったものだな、という台詞を出しかけて止めた。多分、この態度は元来のものだろう。

「ちょうどいいわ。今、貴方の話を聞かせてよ」

「面倒だから嫌」

「糞餓鬼かッ！」

「そんな言葉遣いは、よろしくありませんねえ」

彼はそう言ってから、テーブルに座った。そのまま胡座をかく。その間も、彼女はじとじとと視線を突き刺してくる。

溜め息を吐き、仕方ない、と彼は言った。

「話してやるよ。ちょっとした喜劇だ」

彼の口が開いた。

窓の外は、夜に移ろうとしている。

―Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅ―

白雪姫　ａｃｔ１０（後書き）

白雪姫編は一応これにて完結となりますが、話は次へと繋がります。

眠れる森の美女　ａｃｔ１（前書き）

時間がさかのぼります。

眠れる森の美女　ａｃｔ１

小汚なくチャンスを掴み、否、そのチャンスさえ小賢しく作り出したものだけれど、とにかくそういう方法で俺は騎士という立場を得た。他の奴らと別ルートの生き方というより、そもそも道など存在しなかったという方が正しい。
多少の向かい風は、予想も覚悟もできた。それに負ける気もしなかった。性格上、逆境に孤独という状況に自らを追い込んでしまうことが多かった俺にとって、他人の嫌悪など慣れっこなのだ。今更、傷付くことはなかろう、

と、思っていたのに。

「あ、お、おはようございます！」
「…おう、おはよ」
「今日の訓練のペアは、お決まりですか！？」
「…ああ…、訓練、あったっけか」
「未定でしたら、是非、自分と！」
「いや、是非とも自分と！！」
こんな状況になるとは、予想外だった。
貴族として生まれ、育った騎士たち。生まれた瞬間に決定された生き方をなぞって此処まで至る彼らは、そのせいか、俺に対して異常に尊敬を寄せてくる。大事に育てられた故か騎士たちは未だに純粋で、そういうキラキラした目で見つめられ、ストレートな褒め言葉をかけられると、ひん曲がって育った俺としては、どうもムズムズして居心地が悪い。
嫌われることばかりを予想して、こんなに好かれるとは夢にも思わ

なかった。と、いうより、こうやって尊敬されることは、苦手だったりするんだが。
「悪いな、リックと組むよ」
「そうですか…」
「では、またの機会を期待しております…」
「それでは、失礼します…」
いや、そんなあからさまに落ち込まれても。
「本当に人気者ね」
声がして、振り向いた。そこには、俺をこの立ち位置まで引っ張り上げた本人がいた。
「灰かぶり、お前、王女にしてはドレスが貧相だな」
「だって、ゴテゴテのやつって歩きにくいんだもん」
「我慢だろうが。せっかく王子とのイチャイチャ生活を手に入れたんだから」
「そ、そんなイチャイチャしてないって！！」
「え？もう飽きられたのか？」
「そういう意味じゃないけど！！」
騎士になって、一年になる。勤め先は同じく王城、命を捧げる先は同じく王と国。それでも、兵士と騎士とでは、やはり見える世界が違った。自分を囲うものが変わった。
貴族出身ではないものの、俺にもそれなりの立場的な力が与えられた。騎士に権力がなくては示しが付かないから、世間体を考えただけのものだとわかりつつも、嬉しかった。それが重荷になることは、ないと思っていた。

眠れる森の美女　ａｃｔ２

「みんなの人気者がぁ、ペアになってくれるとはぁ、身に余る光栄い」
「リック、顔と台詞が違う」
「だって、知らない内に指名されているんだもん。俺、可愛い子と討ち合いしたかったんだもん。お前とじゃ、嫌なんだもん」
「そうか。俺もお前が嫌だから、お互い様で公平で素晴らしいじゃないか。…そんなことよりも、リック」
今は訓練まっただ中。
兵士のときは単純に力があれば何とかなったのだが、騎士は技術を要する。相手を倒すのが目的ではなく、自分が勝つのが目的なのだ。勝ち方の華々しさも、実力の一つ。自分を如何に見せるか。
これは、二人組で軽く剣を交わす訓練。…そう、軽く。

「リック、お前、それって真剣だろ？」

彼が気味悪く、笑った。
「バレた？模擬剣なくしちゃってさぁ」
「俺と組むのが、そんなに嫌なのか？」
「嫌だよ。真剣に怯えて逃げ惑う図として望ましいのは、やっぱり可愛い子だよ。お前は怯えもしないから、つまらない」
「愚痴を言いながら、本気で振り回すな」
「大丈夫。まだ本気の８０％くらいだから」
「お前の１００は、一般的で言う２００だがな」
おかしな偶像崇拝のせいで騎士団から浮いている俺にとって、唯一対等に会話できる相手が、今嬉々として俺を殺そうとしているリック。その技術力は騎士団でもトップなのだが、性格が騎士道と大きく外れている為に、彼は疎まれる存在だ。彼自身は、気にしていな

いようだったが。
俺と組みたがる奴らも、彼を指名すれば、あっさりと引き下がる。納得するほど実力があるし、俺が組むことで自分が彼と組む可能性がなくなるからだ。
「ねぇ、何か問題とか起こさないの？」
「何だよ、いきなり」
「いきなり騎士になった君なら、もっと厄介事を起こせるんじゃない？」
何だ、この厄介事至上主義。いや、俺もだけど。
「起こしたくても、見つからないんだ」
「嫌われると思いきや、好かれちゃうしさぁ。つまらないね」
「嫌われる予定だったが、その位置に既にお前がいたんだよ」
こんな会話をしている間にも、リックの剣は異常な速さと正確さで俺を狙う。模擬剣を壊さない、ギリギリの力加減で。…模擬剣での討ち合いの訓練だから、防具していないんだが…俺、死なないかな。
「あ、厄介事に巻き込めばいいのかな？」
「は？」
「ねえ、美人に会ってみない？」
「お前の知り合いに美人なんていたのか」
「うん、年下」
「幼女かよ。俺、完成した体の女が好み」
「ま、いいから、会ってみなって。な？」
俺は頷いた。特に、何も考えていなかった。
「よし、決定」
リックがニヤニヤして、このときになって、身の危険を察知した。けれど、今更、引き返せるはずもなく。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8161v/

リアリストによる絵空事

2012年1月11日01時48分発行